

## 通知票をもらう前に

期末テストが終わると次は通知票ですね。どちらも、できれば避けて通りたいものでしょうが、ないと気になるものです。いったい自分にどれだけの力がついたのか全く分からないというのは、将来を考える時に不安材料となりますからね。

生徒の皆さんがもらう通知票の評価と、私が中学生の時にもらっていた通知票の評価は違います。私と比べるとずいぶん昔のことになってしましますね。確か平成十三年度だったと記憶していますが、この年度から通知表の評価が大きく変わりました。したがって、皆さんのお父さんお母さんの中にも、私の時と同じ評価の仕方につけた通知票をもらっていた方がみえると思います。

私が中学時代にもらっていた成績は「相対評価」という方法でつけられました。今は「絶対評価」です。時代と共に、評価の仕方が少しずつ違ってきますが、簡単に説明しますね。

「相対評価」は、全体の中でどれくらいの位置にいるかを表したものです。通知票というと、「1」や「5」をつけられる生徒が全体の何パーセントかがおおよそ決まっていたのです。例えば、三十人学級で「5」が10%なら、「5」が付けられる生徒は三人です。四番目の人は「4」となってしまう。

「また『（通知票の数字）』かあ。がんばっても変わらないなあ。」

当時はこのようにつぶやいていました。「がんばった」と思っても、仲間も同じように頑張りますからね。通知票の数字はそんなに簡単には変わりません。当時はそれが当たり前でした。ある学校では、実力テストで三百点近くとる生徒でも通知票には「1」がつくことも……生徒数の少ない学校ではそういうことがあったようです。

今は「絶対評価」という方法でつけられています。これは、他の生徒は関係ありません。評価規準（基準ではありません）が設けられており、それに照らし合わせて一人一人が評価されます。昔のようなパーセントはありません。だから、「5」が十人、十五人なんてことも可能性としてはあるのです。

以前紹介した中日新聞の須田亜香里さんの文章の中にこんな部分がありました。

「だれかと同じ時間をかけることに意味があるのではなく、自分の能力を客観的に見た上で、それぞれが違った努力を重ねたことに価値がある。一生懸命走っても一位になれないこともある。」

二十代の彼女はこう考えています。「自分の能力を客観的に見る。そして、自分ならではの努力を積み重ねる」絶対評価の今だから、大きな意味を持つ言葉です。（六月十一日 記）